

2 展示

【概 要】

歴博は、研究の成果および情報の発信をおこなっている。展示については、総合展示および企画展示、特集展示、くらしの植物苑における特別企画、人間文化研究機構の基盤機関が連携して展示を企画・実施する連携展示などをその具体的な活動として挙げることができる。

総合展示はこれまで研究の進展に応じたりリニューアルを実施してきている。ただいま第5・6室（近代・現代）のリニューアルが進行中であるほか、2022年度から第2室（中世）のリニューアル委員会が発足した。

2022年度は企画展示2本、特集展示4本を実施した。企画展示「加耶—古代東アジアを生きた、ある王国の歴史—」（2022年10月4日～12月11日）は、古墳時代の倭と頻繁な交渉を重ねた加耶について、近年の韓国における調査・研究によって明らかになった姿を出土資料に基づいて展示した。開催にあたっては学術交流協定の締結機関である韓国国立中央博物館に資料貸与や展示内容について全面的な協力を仰いだ。また展示の学術的背景としては本館共同研究「古墳時代・三国時代の日朝関係における交渉経路と寄港地に関する日韓共同研究」等が挙げられる。なお、当企画展示は本館開催後に九州国立博物館でも巡回開催した（2023年1月～3月）。

企画展示「いにしえが、好きっ！—近世好古図録の文化誌—」（2023年3月7日～5月7日）は、本館所蔵の近世好古図譜『聆涛閣集古帖』を中心に、当時の好古家たちのネットワークや実証主義的歴史観を、考古資料や文献資料、絵画、美術資料等から立体的に示し、近代博物館の前史となる近世後期の知的営為を描出した。当展示は本館共同研究「『聆涛閣集古帖』の総合資料学的研究」の成果でもある。

特集展示は第3展示室の特集展示「『もの』からみる近世」として、「水滸伝ブームの広がり」（2022年8月3日～9月4日）、「印籠とたばこ入れ」（2022年10月25日～12月4日）、「中世公家の＜公務＞と生活—広橋家記録の世界—」（2023年3月7日～5月7日）、第4展示室の特集展示として、「来訪神、姿とかたち—福の神も疫神も異界から—」（2023年1月17日～5月14日）を開催した。このうち、「中世公家の＜公務＞と生活」については、本館共同研究「『広橋家旧蔵記録文書典籍類』を素材とする中世公家の家蔵史料群に関する研究」の成果でもある。

くらしの植物苑の特別企画としては、「伝統の桜草」（2022年4月12日～5月5日）、「伝統の朝顔」（2022年8月3日～9月4日）、「伝統の古典菊」（2022年11月1日～27日）、「冬の華・サザンカ」（2022年11月29日～2023年1月29日）を開催した。

展示担当 村木 二郎

企画展示等の実施

企画展示

「加耶—古代東アジアを生きた、ある王国の歴史—」	2022年10月4日～12月11日
「いにしえが、好きっ！—近世好古図録の文化誌—」	2023年3月7日～5月7日

くらしの植物苑特別企画

「伝統の桜草」	2022年4月12日～5月5日
「伝統の朝顔」	2022年8月3日～9月4日
「伝統の古典菊」	2022年11月1日～27日
「冬の華・サザンカ」	2022年11月29日～2023年1月29日

特集展示

第3展示室 特集展示「もの」からみる近世

「水滸伝ブームの広がり」	2022年8月3日～9月4日
「印籠とたばこ入れ」	2022年10月25日～12月4日
「中世公家の＜公務＞と生活—広橋家記録の世界—」	2023年3月7日～5月7日

第4展示室 特集展示

「来訪神，姿とかたち一福の神も疫神も異界から―」

2023年1月17日～5月14日

[総合展示リニューアル]

〈総合展示新構築〉

1. 第5室・第6室リニューアル委員会

(1) 概要

昨年度から引き続き，今年度での詳細設計の完成を目指し，展示設計業者とブロック・コーナーごとに打ち合わせを重ね，造作物，展示資料，パネル等の内容を詰めていった。5月25日に総合展示検討会議を開催し，外部の有識者から展示構成に関する助言等を得た。8月31日には全体会議を開催し，展示構成について，リニューアル委員会全体で最終確認を行った。しかし，ウクライナ情勢等に起因する資材高騰の影響を受け，現行の展示構成を大幅に見直すこととなり，資材高騰による影響をふまえた展示構成を改めて検討し，次年度の9月までに詳細設計を完成させることとなった。そのために，1月と3月に2度の全体会議を開催して合意を得た。その他は，リニューアルに関する資料購入や複製製作，資料調査を実施した。

(2) 総合展示検討会議

2022年5月25日 第1回総合展示検討会議

(3) リニューアル委員会（全体会議）

2022年8月31日 第1回全体会議

2023年1月9日 第2回全体会議

2023年3月26日 第3回全体会議

(4) リニューアル委員会（館内会議）

2022年4月12日，5月13日，6月10日，7月8日，8月24日，9月9日，10月14日，11月11日，12月13日，
2023年1月5日，1月13日，2月1日，2月10日，3月10日

(5) 展示設計業者との打合せ

2022年5月10日，5月11日，5月18日，5月19日，6月22日，7月7日，7月13日，7月14日，7月20日，7月21日，8月4日，8月8日，8月10日，9月1日，9月8日，9月9日，11月29日，12月1日，12月6日，12月9日，12月27日，2023年2月3日

2. 第2室リニューアル委員会

(1) 概要

1983年の開館以来，研究の進展にあわせて総合展示室のリニューアルを徐々に実施し，第3・4・1室は終了，第5・6室は現在進行中である。第2室は開館当初に設置されたにもかかわらず，1997～99年度に暫定改善を実施した程度で，本格的なリニューアル改善は実施していない。しかしこの40年間の中世史研究の進展には著しいものがあり，いつまでも現状の展示のままで置くわけにはいかないと判断し，2022年度からリニューアル委員会を発足することとなった。開室目標は2031年度（2032年3月）とする。当面の課題は広範な中世史研究の状況把握と，現状展示改善点の検討により，新たなテーマを立てることと考え，リニューアル委員会では研究会形式の会議を積み重ねることとした。

(2) リニューアル委員会（全体会議）

2022年8月23日～8月24日 第1回全体会議

2023年3月13日～3月14日 第2回全体会議

(3) リニューアル委員会・共同研究「中世日本の地域社会における都市の存立と機能の研究」合同調査・研究会

2023年11月4日～11月6日 調査・研究会（広島県）

[企画展示]

企画展示「加耶―古代東アジアを生きた，ある王国の歴史―」

会期：令和4年10月4日（火）～令和4年12月11日（日）（開催日数：60日間）

1. 展示趣旨

古墳時代の「倭」の社会は、朝鮮半島から多様な文化をさかんに受け入れ、取捨選択し、変容させ、みずからの文化として定着をはかる。それは須恵器や鉄器の生産、金工技術、馬匹生産、灌漑技術、炊事道具やカマドなど多岐にわたる。その中で最も頻繁な交渉を重ねた政治体有加耶であった。加耶はひとつの古代国家を形成することはなく、金官加耶、大加耶、小加耶、阿羅加耶などがいくつかの地域政治体がゆるやかな連携をはかっていた。その加耶の実態は、近年の韓国における調査・研究によってかなり具体的に明らかになっている。その最新の姿を墳墓や集落から出土した諸資料から提示し、あわせて倭との交渉様態を描くのが、本展示の趣旨であった。

そのために、学術交流協定の締結機関である韓国国立中央博物館に資料貸与や展示内容についての全面的な協力を仰いだ。展示の学術的な基盤としては、総合展示第1展示室のテーマ4（倭の登場）、テーマ5（倭の前方後円墳と東アジア）の国際交流に関する内容、これまで進めてきた中央博をはじめとした韓国諸機関との国際交流事業、そして歴博共同研究「古墳時代・三国時代の日朝関係における交渉経路と寄港地に関する日韓共同研究」を挙げることができる。

2. 展示構成と主な展示資料

展示構成

プロローグ 加耶とは何か

1章 加耶を語るもの

2章 加耶への道

3章 加耶人は北へ南へ — 4世紀

4章 加耶王と国際情勢 — 5世紀～6世紀初め

5章 加耶のたそがれ

エピローグ 加耶史と現在

主な展示資料

【借用資料】

韓国中央博の2019年度企画展の展示資料より選定

【歴博所蔵資料】

韓国泗川勸島遺跡出土弥生系土器（第1展示室リニューアル時の釜山大学博物館借用資料）

国立歴史民俗博物館資料図録2012『古墳関連資料図録』にある金工品（帯金具、環頭大刀）など

沖ノ島奉獻品複製資料など

【映像】

韓国中央博が製作した加耶関連の映像資料、ならびに韓国国立博物館紹介映像資料

3. 刊行物

展示図録（A4判 74頁）

展示解説シート（A4版 4頁）

広報用ポスター、チラシ

4. 関連行事

・報道向け内覧会 令和4年10月3日（月）

・第440回歴博講演会

期 日 令和4年10月8日（土）13：00～15：00

演 題 加耶—古代東アジアを生きた、ある王国の歴史—

会 場 歴博講堂

講 師 高田 貫太

・第441回歴博講演会

期 日 令和4年11月12日（土）13：00～15：00

演 題 中国と加耶と倭

会 場 歴博講堂

講 師 上野 祥史

・第442回歴博講演会

期 日	令和4年12月10日（土）13：00～15：00
演 題	加耶と倭の武器と武具
会 場	歴博講堂
講 師	松木 武彦

5. 成果と課題

本展示は、公式的には2018年12月に、学術交流協定機関である韓国国立中博物館から共催の打診があった。館内の諸調整を経て、2020年7月に歴博・中央博・そして九州国立博物館の三館共催で開催することが決定した。しかしながら、コロナ禍の影響により、やむを得ず開催延期となった。展示代表者としては、中止も覚悟したが、三館の協議の結果、歴博で2022年10～12月、九州博で2023年1～3月に開催することで合意した。

その合意と展示開催に至るまでには、多くの方々のご協力があった。18機関にもものぼる韓国国内資料所蔵機関から再度資料を集荷していただくとともに、歴博への運搬・資料点検並びに演示作業等に全面的にご協力いただいた中央博の方々、中央博館長に対し展示実現のために私信をお送りいただいた西谷館長、展示期間の変更に伴い、歴博全体の展示計画の調整をしていただき、さまざまな展示準備を円滑におすすめていただいた博物館資源センターならびに事業課の方々、みずからの展示開催時期の変更を受け入れてくださった「色づくし展」代表の鈴木さんをはじめとする教員の方々、資料をより魅力的に見せる展示場デザインを設計いただいた佐々木企画の柳澤さん、タイトな日程の中で慎重な扱いが必要な資料の運搬・演示を行ってくださったヤマト運輸のみなさん、その他にも日韓の多くの方々のご協力があって、本展示は開催することができた。この場を借りて、御礼申し上げたい。

展示の広報活動は効果的に行うことができた。ユースプランニングさんのご協力の下、メディアキャラバンを二日間計7社にわたり行ったこと、三度にわたり歴博講演会を開催したこと、そしてyoutubeによる展示内容に関する動画配信などが、非常に有効であった。広報活動を積極的に繰り返していただいた広報連携センターならびに広報サービス室の方々、ユースプランニングさんにもまた御礼を申し上げたい。

展示開催に至るまでの反省点としては、借用資料の確定、三機関における運搬経費の分担、そして図録の構成・内容についての交渉が、紆余曲折してしまい、そのために関係部署にさまざまな業務的負担をかけてしまったことが挙げられる。その理由は大きく二つある。ひとつは、あまり一般化はしたくないが、日本（歴博・九州博）と韓国（中央博）では業務の進め方や意思決定の過程やタイミングにさまざまな違いがあることである。また、「加耶」と古代日本（倭）の関係に関する否定的な反応が韓国世論の一部に見られたため、それに対して中央博が対応する必要性が生じたためである。そのため、紆余曲折もある程度はやむを得ず、懸案事項は最後には解決をみたけれども、もう少し密に意思疎通を図り得たのでは、と自省している。

展示内容に関する観覧客やメディアの反応は高いものが多かった。それは1000枚を超すアンケートに集約されている。良好な意見が多かったけれども、加耶の歴史や加耶と倭の交流史についてのより詳細な説明が欲しい、加耶と任那の関係について知りたい、という要望もまた多かった。今回の展示は、過去30年にわたる考古学的な研究を基礎にして、加耶の通史自体をできるだけわかりやすく紹介することが目的であった。そのために、より詳細な内容については、図録に反映させるようにした。ただ、ある程度の知識を有する観覧客が、展示のみを観覧し図録を購入しなかった場合、少々物足りなかったかもしれない。展示（パネル）と図録の内容のバランスの重要性を再確認するとともに、あるいは「より詳しい内容は図録をぜひお読みください」などの掲示を展示場前にしてもよかったかな、と考えた。

ともあれ、4年に渡る日韓の学術的・事務的な協議に基づいて、相互の信頼関係を構築し、特段の事故もなく歴博における展示を無事に終了できたことにホッとしている。あらためて、展示開催から終了まで陰ひなたなく支えてくださったすべての方々に御礼を申し上げたい。

6. マスコミでの取り上げ

【新聞】

朝日新聞、読売新聞、毎日新聞、東京新聞、千葉日報、日本教育新聞、教育家庭新聞、東洋経済日報、西日本新聞、全私学新聞、陶業時報等、記事数62（2023年3月末）

【雑誌・ミニコミ誌】

時空旅人11月号、芸術新潮10～12月号、目の眼10～12月号、ぐるっと千葉10～12月号、月刊経団連10月号、陶説10月号、東京人11月号、ムー11月号、博物館研究12月号等、58誌（2023年3月末）

【テレビ・ラジオ】

ケーブルネット296「歴博のミカタ」、296ニュース 2番組（2023年3月末）

【その他】

Internet Museum, 美術展ナビ, カドブン 他ウェブ掲載多数 81件 (2023年3月末)

企画展示「いにしえが、好きっ！—近世好古図録の文化誌—」

会期：令和5年3月7日（火）～令和5年5月7日（日）（開催日数：62日間）

1. 展示趣旨

本企画展示の主人公である『聆涛閣集古帖』（国立歴史民俗博物館蔵）は、江戸時代後期に活躍した摂津国菟原郡住吉村（現在の神戸市東灘区住吉）の豪商・吉田家により編纂された古器物の一大模写図録です。吉田家の豊かな財力を背景に、当時の学者や貴族たちとの交流を通じ、三代にわたって多くの古文書や古物を蒐集して、この図録は編集されました。ちなみに「聆涛閣」とは、「波の音が聞こえる書庫」という意味で、神戸の灘の海岸近くに存在していました。

吉田家は、「灘」の地を生かして燈油製造業、酒造業、さらにそれらを一大消費地江戸に運ぶための廻船業といった実業に力を入れ、豪商として巨大な富を築き上げました。その莫大な財力を背景に、第17代当主の吉田道可（通称：喜平次）（1734～1802）、次代の肅（1768～1832）、次々代の敏（1802～1869）と三代、約100年にわたり、古器物を蒐集し、その文庫である聆涛閣に収蔵したのです。

『聆涛閣集古帖』は、さまざまな古器物をテーマ別に32のジャンルに分類し、その数は約2400件にものほります。写された対象は、人間の過去の痕跡、すなわち歴史に関する広い領域に及んでいます。つまりこれは、近代の博物館が成立する以前の、「いにしえに対するまなざし」を知ることのできる貴重な資料なのです。

この企画展示には、しばしば「好古」という言葉が登場します。文字通り「いにしえを好む」という意味ですが、江戸時代後期には、「好古家」と呼ばれる人たちが、各地に残る古い資料を調査し、その存在と魅力を伝えてきました。その意味では、文化財を伝える先駆者たちといえるかもしれません。

考古遺物にせよ、古文書にせよ、美術工芸品にせよ、それ自体が歴史的価値や美術的価値のあるものとして貴重ですが、それだけでなく、どの作品も、今に伝えられてきた物語を背負っています。その物語に光を当てることが、この展示のねらいでもあります。

その物語は、複雑に入り組んでいて、必ずしもわかりやすいとはいえませんが、展示を通じて、当時の好古家たちの「熱量」を少しでも感じとっていただければ、これにまさる喜びはありません。みなさまが、それぞれの関心から、さまざまな思いをめぐらせながら、この展示を楽しんでいただくことを願ってやみません。

（企画展示図録の「ごあいさつ 一波の音が聞こえる書庫、「聆涛閣」へようこそ！」より一部改変）

2. 展示構成と主な展示資料

展示構成

第1章『聆涛閣集古帖』とはなにか（企画展示室A）

『聆涛閣集古帖』に描かれた古器物が、どのような経緯で伝えられ、実物としてどのように残されているかを紹介する。好古図譜という2次元の世界を、実物・複製・復元品等により3次元的な立体展示を試みる。

第2章『聆涛閣集古帖』を伝えた吉田家（企画展示室A）

『聆涛閣集古帖』を伝えた、神戸の吉田家とはどういう家だったのか？吉田家三代（道可1734～1802、肅1768～1832、敏1802～69）に関わる諸史料や、吉田家を取りまく神戸・住吉の地域の歴史を通じて、『聆涛閣集古帖』が編纂された背景をさぐる。

第3章 よみがえる聆涛閣コレクション（企画展示室B）

現在各地に散逸している聆涛閣コレクション（吉田家旧蔵品）について、これまでの研究成果をふまえて、ごく一部だが展示上で再現を試みる。

第4章 正倉院宝物の「発見」（企画展示室B）

『聆涛閣集古帖』にも描かれている正倉院宝物への関心は、近世の「好古」志向に大きな影響を与えている。たとえば奈良の彫刻家・森川杜園（1820～94）は、正倉院宝物の模造の製作を依頼され、そのための宝物図を作成していた。正倉院宝物図とその模造製作を通して、近世における古器物へのまなざしをさぐる。

第5章『聆涛閣集古帖』を取りまく好古家ネットワーク（企画展示室B）

藤貞幹（1732～97）、松平定信（1759～1829）、松浦武四郎（1818～88）など、吉田家三代とゆかりの深い同時代の代表的な好古家たちの知のネットワークを明らかにする。

主な展示資料

〔国立歴史民俗博物館〕

聆涛閣集古帖 江戸時代 国立歴史民俗博物館蔵
 宇治橋碑 復元 国立歴史民俗博物館蔵（原品は放生寺蔵，重要文化財）
 船氏王後墓誌 複製 国立歴史民俗博物館蔵（原品は財団法人三井文庫蔵，国宝）
 小野毛人墓誌 複製 国立歴史民俗博物館蔵（原品は崇道神社蔵・京都国立博物館寄託，国宝）
 中細形銅戈 推定三並ヒエデ出土 弥生時代 国立歴史民俗博物館蔵
 銅剣 愛媛県保田出土（1号・2号） 弥生時代 国立歴史民俗博物館蔵
 銅鐸 滋賀県新庄出土 複製 弥生時代 国立歴史民俗博物館蔵（原品は倉敷考古館蔵）
 『雲根志』 江戸時代 国立歴史民俗博物館蔵
 隠岐国駅鈴 複製 国立歴史民俗博物館蔵（原品は玉若酢命神社所蔵，重要文化財）
 古瓦譜 江戸時代 国立歴史民俗博物館蔵
 古瓦 奈良時代 国立歴史民俗博物館蔵
 瓦経 小町塚・菩提山出土 承安4年（1174） 国立歴史民俗博物館蔵
 正倉院古文書 複製 国立歴史民俗博物館蔵（原品は奈良時代，宮内庁正倉院事務所蔵）
 銅印（印文「隠岐倉印」） 複製 国立歴史民俗博物館蔵（原品は玉若酢命神社蔵，重要文化財）
 紀伊国那賀郡司解 承和12年（845） 国立歴史民俗博物館蔵
 白氏文集 卷第一四 寛喜3年（1231）写 国立歴史民俗博物館蔵 重要文化財
 ならの落葉 明治14年（1881）刊 国立歴史民俗博物館蔵
 長元二年九月二八日榮山寺牒 長元2年（1029） 国立歴史民俗博物館蔵 重要文化財
 公私古印譜 初集 安政2年（1773）自序 国立歴史民俗博物館蔵
 公私古印譜 明治20年（1887）刊（1915年再版） 国立歴史民俗博物館蔵
 集中図録（集古図統録） 印章 江戸後期写 国立歴史民俗博物館蔵
 埋麝発香 印部 天保11年（1840）自序 国立歴史民俗博物館蔵
 題箋軸 国立歴史民俗博物館蔵
 東大寺北上院北方西端屋敷売券・寄進状 国立歴史民俗博物館蔵
 典籍付札 平安時代 国立歴史民俗博物館蔵
 琵琶 銘「白鳳」 在田坊作 国立歴史民俗博物館蔵
 集古図巻二地理（延暦二十四年輿地図写） 江戸時代 国立歴史民俗博物館蔵
 備前国津高郡収税解 宝亀7年（776） 奈良時代 国立歴史民俗博物館蔵
 秦公永吉解 承和7年（840） 国立歴史民俗博物館蔵
 丹波国吉富新庄内刑部郷検注帳（断簡） 寛元4年（1246） 国立歴史民俗博物館蔵
 光厳院院宣 建武3年（1336） 国立歴史民俗博物館蔵
 大徳寺門徒等連署讓状 永享10年（1438） 国立歴史民俗博物館蔵
 摂津名所図会 寛政10年（1798）刊 国立歴史民俗博物館蔵
 茶室・書院起絵図（銀閣寺東求堂） 江戸時代 国立歴史民俗博物館蔵
 在原業平像 模写 江戸時代 国立歴史民俗博物館保管（水木家寄託資料）
 穂井田忠友像（冷泉為恭筆模写） 平川冬嶺筆 明治時代 水木家資料（国立歴史民俗博物館寄託）
 観古雑帖初篇 天保12年（1841）序刊 国立歴史民俗博物館蔵
 穂井田忠友書状 天保15年 国立歴史民俗博物館蔵
 衝口発 天明元年（1781）著，文政2年（1819）頃刊 国立歴史民俗博物館蔵
 刀剣図考 栗原信充撰 天保14年刊 国立歴史民俗博物館蔵
 群書一覽 享和元年（1802）刊 国立歴史民俗博物館蔵
 広隆寺・東寺裂帳 江戸後期 国立歴史民俗博物館蔵

〔春日大社〕

模造 檜和琴 明治8年（1875） 春日大社蔵
 模造 金銀装横刀 明治時代（19世紀） 春日大社蔵

〔関西大学関係〕

馬形埴輪 古墳時代 関西大学博物館蔵
 三鈷杵 奈良時代か 関西大学博物館蔵
 琴柱形石製品 古墳時代 関西大学博物館蔵

斧形石製品 古墳時代 関西大学博物館蔵

鍬形石 古墳時代 関西大学博物館蔵

近江国大國郷郷長解 嘉祥元年(848) 関西大学図書館蔵

解人頤廣集雋 明和7年(1770)刊 関西大学図書館蔵

〔京都大学関係〕

正倉院東大寺宝図 明治8年(1875) 京都大学附属図書館蔵

拓本類集帖 江戸末期 京都大学附属図書館蔵

桑蓬集 諸号編 安永2年(1773)刊 京都大学大学院文学研究科図書館蔵

〔宮内庁書陵部〕

御車轅之図 江戸時代 宮内庁書陵部蔵

輿之図 文政11年(1828) 宮内庁書陵部蔵

『日本書紀』巻第二 南北朝期写 宮内庁書陵部図書寮文庫蔵

〔慶應義塾大学関係〕

入木道相承系図 文政13年(1830)写 慶應義塾(センチュリー赤尾コレクション)

万里小路藤房像 室町時代 慶應義塾(センチュリー赤尾コレクション)蔵

万里小路藤房像(模本) 江戸時代 慶應義塾(センチュリー赤尾コレクション)蔵

熊野新宮神宝図 宇治田忠郷撰 寛政6年(1794) 慶應義塾(センチュリー赤尾コレクション)

法隆寺宝物図巻 江戸末期 慶應義塾(センチュリー赤尾コレクション)

穂井田忠友像 冷泉為恭画 江戸末期 慶應義塾(センチュリー赤尾コレクション)

集古十種稿 松平定信編 寛政十二年(一八〇〇)序刊 セ000-025 慶應義塾(センチュリー赤尾コレクション)

集古図 藤貞幹撰 江戸末期 慶應義塾(センチュリー赤尾コレクション)

好古小録 好古日録 藤貞幹撰 寛政7年(1795)・同9年刊 慶應義塾大学附属研究所斯道文庫

模造尺 江戸時代 慶應義塾大学附属研究所斯道文庫蔵

本朝度量権衡 江戸後期 慶應義塾大学附属研究所斯道文庫

〔公益財団法人 泉屋博古館〕

六鈴獸形鏡 古墳時代 泉屋考古館

線刻釈迦三尊等鏡像 平安時代(12世紀) 泉屋博古館蔵 国宝

〔公益財団法人 白鶴美術館〕

馬具 河内国金剛輪寺出土 古墳時代 白鶴美術館蔵

墨絵弾弓・粉地彩色倚几 模造 明治22年(1889) 白鶴美術館蔵

〔古代学協会、京都府京都文化博物館〕

古瓦類 奈良～平安時代 京都府京都文化博物館蔵

近江国大國郷埴田壳券 延暦15年(796) 古代学協会蔵(京都文化博物館寄託)

高向依重文書焼失状 応徳元年(1084) 古代学協会蔵(京都文化博物館寄託)

清原長谷丸直米請取状 長承2年(1133) 古代学協会蔵(京都文化博物館寄託)

『大内裏図考証』 江戸時代 古代学協会蔵(京都文化博物館寄託)

某日次記断簡(安倍孝重記断簡) 鎌倉時代 京都文化博物館蔵

〔サントリー美術館〕

笙 銘「小男鹿丸(小男鹿)」 行円作 建保三年(1215) サントリー美術館蔵

染革見本帖 江戸後期 サントリー美術館蔵

〔親王寺〕

連弧文鏡(内行花文鏡) 中国・後漢時代(弥生時代) 親王寺蔵

三角縁波文帯三神二獸博山炉鏡 古墳時代 親王寺蔵

石帯 平安時代 親王寺蔵

〔東京国立博物館〕

白瑠璃埴 古墳時代 東京国立博物館蔵 重要文化財

模造 逆沢瀉威鎧雛形 堀越紫郷作 大正15年(1926)以前 東京国立博物館蔵

東大寺宝物図 文化14年(1817) 東京国立博物館蔵

壬申検査社寺宝物図集 明治5年(1872) 東京国立博物館蔵

正倉院御物図 明治8年(1875) 東京国立博物館蔵

聆涛閣帖 江戸時代末期刊 東京国立博物館蔵

模造 金銀平文琴 明治12年(1879) 東京国立博物館蔵

模造 鳥獸葡萄鏡 明治8年(1875) 東京国立博物館蔵

模造 子日手辛犁 明治時代(19世紀) 東京国立博物館蔵

模造 粉地彩絵倚几 明治時代(19世紀) 東京国立博物館蔵

〔東京大学史料編纂所〕

光格上皇修学院御幸絵図 上巻 江戸時代 東京大学史料編纂所蔵 国宝

『吉田文書』三・五 明治22年(1889)・昭和7年(1932) 東京大学史料編纂所蔵

台紙付写真 昭和7年(1932) 東京大学史料編纂所蔵

丹波国吉富新莊刑部郷預所方散用状(断簡) 応永13年(1406) 東京大学史料編纂所蔵

裏松固禪清涼殿障子事勘文案等 寛政元年(1789) 東京大学史料編纂所蔵

〔奈良国立博物館〕

模造 子日目利箒(附 粉地彩絵倚几) 明治時代(19世紀) 奈良国立博物館蔵

模造 子日手辛鋤 附粉地彩絵倚几 明治8年(187) 奈良国立博物館蔵

模造 白石火舎 明治時代(19世紀) 奈良国立博物館蔵

〔その他〕

画文帯四仏四獣鏡 中国・晋代(古墳時代) 京都国立博物館蔵 重要文化財

石剣 弥生時代 松山市考古館蔵(原品は恵依弥二名神社蔵)

御札 江戸時代か 恵依弥二名神社蔵

石剣 弥生時代 白鳥神社(東かがわ市)蔵

中広形銅戈 宇佐高校校庭出土 弥生時代 明治大学博物館蔵

扁額「八幡大菩薩」正平21年(貞治5年:1366) 相賀八幡神社蔵

金銅鉢 延長7年(929) 奈良・朝護孫子寺 重要文化財

大円山形星兜 鎌倉時代 淡島神社蔵 重要文化財

羯鼓胴 建永2年(1207) 奈良・唐招提寺蔵 重要文化財

聖護院門跡保管「御車輿」(網代輿)木部構造模型 令和5年(2023) 落合里麻製作

伝吉田道可坐像 江戸時代 徳本寺蔵

耳比磨利帖 玉田成章編 天明7年(1787)刊 国文学研究資料館蔵

漱看の席 起こし絵図 跡見学園女子大学図書館蔵

吉田家関係資料 江戸時代 住吉歴史資料館蔵

三角縁吾作銘二神二獣鏡 中国・魏代(古墳時代) 個人蔵(高松市歴史資料館寄託)

鰐口 正安3年(1301) 秋篠寺蔵

銅鐸 弥生時代 東京大学総合研究博物館蔵

河原継麻呂手実 天平20年(748) 個人蔵

正倉院宝物図 天保4年(1833) 東大寺蔵

正倉院御物写 幕末~明治 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻蔵

集古十種原稿類 江戸後期 大谷大学博物館蔵

摂津国菟原郡住吉村文書 江戸時代 大阪歴史博物館蔵

住吉良運商社文書 江戸時代 神戸市立博物館蔵

一疊敷原寸模型 原品:明治時代 国際基督教大学博物館湯浅八郎記念館蔵

鬼面鈴 青銅製 年代不詳 静嘉堂文庫

森川杜園書状 明治22年(1889) 個人蔵

梅園奇賞 文政11年(1828)刊 個人蔵

3. 刊行物

展示図録(A4判 256頁)

展示解説シート(A4版 4頁)

広報用ポスター, チラシ

4. 関連行事

- ・報道向け内覧会 令和5年3月6日（月）
- ・第443回歴博講演会『『聆涛閣集古帖』と近世好古家の世界』
令和5年3月11日（土） 13時～15時 於国立歴史民俗博物館講堂 藤原重雄，一戸渉，三上喜孝
- ・第115回歴博フォーラム「いにしへの「玉手箱」，近世好古図録をひらく」
令和5年4月1日（土） 13時～16時30分 於国立歴史民俗博物館講堂
趣旨説明 三上喜孝
吉田広「弥生時代石剣の集古帖への記載」
村野正景「集古帖の瓦帖が語る藤貞幹の古瓦譜編集過程」
清水健「近世好古図録に描かれた寺社宝物」
落合里麻「網代輿を「作る」視点で考える」
加藤明恵（神戸大学大学院人文研究科特命助教，展示協力者）『『集古十種』編纂をめぐる吉田道可と松平定信の交流』
山下大輔『『聆涛閣集古帖』と『本山コレクション』』
- ・令和5年度歴博友の会歴史学講座
令和5年4月9日（日） 13時30分～15時30分 於国立歴史民俗博物館講堂
三上喜孝「近世好古図録『聆涛閣集古帖』をひもとく」
- ・講演会「よみがえる聆涛閣コレクション 神戸歴史遺産「神戸の豪商・吉田家関係資料」を知り，守り，伝える」
（主催：人間文化研究機構基幹研究プロジェクト「歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業」）
令和5年4月15日（土） 13時～16時30分 於御影公会堂（兵庫県神戸市）
藪田貫（兵庫県立歴史博物館館長）「摂津・河内の旧家と武家の交流―住吉村吉田喜平次を中心に―」
三上喜孝「『聆涛閣集古帖』の魅力 ―国立歴史民俗博物館企画展示「いにしえが，好きっ！―近世好古図録の文化誌―」がめざしたもの―」
須藤宏（神戸史談会）「聆涛閣と宝物，明治以降」
加藤明恵「吉田道可の文化的ネットワーク―松平定信『集古十種』編纂を中心に―」
古市晃「吉田家資料の伝来と新出資料の発見」

5. 成果と課題

（1）成果

本企画展示は，館蔵資料である『聆涛閣集古帖』をメインテーマにすえた展示である。これまでこの資料は，総合展示第三室に常設展示されていたが，本格的な研究がなされておらず，2017年度から3年間にわたり共同研究を進めた。その成果として本格的・全面的な展示が実現できた。

展示のコンセプトは，1000年以上にわたる歴史資料，しかも研究ジャンルを超えた歴史資料を，モノそのものだけでなく、『聆涛閣集古帖』という江戸時代後期の好古図譜を通して，それらの歴史資料が背負ってきた物語を読み解き，現在の文化財保護や博物館展示にも通じる問題意識を提供できた意味で，新しい試みであるといえる。『聆涛閣集古帖』に描かれた古器物は，現在の研究分野でいえば考古学，歴史学，美術史学など多岐にわたり，その分野の第一線で活躍する館外の中堅研究者を展示プロジェクト委員として組織し，学際的協業によってこの企画展示が成立し得た。

展示資料については，館蔵資料をできるだけ活用することはもちろん，国立文化財機構の国立博物館，私設の博物館や美術館，東大寺，唐招提寺，朝護孫子寺，秋篠寺等の古刹の所蔵資料，個人蔵の資料など，豊富で多様な資料を借用した。これが可能になったのは，館外の展示プロジェクト委員がこれまで形成してきた人的ネットワークによるところが大きい。

本企画展示の借用先でとくに意識したのは，大学博物館・図書館所蔵資料である。大谷大学，関西大学，京都大学，慶應義塾大学，国際基督教大学，東京大学，明治大学から多くの資料を借用したのは，大学博物館・図書館が所蔵する資料にはまだ知られていない貴重な資料が眠っていることが多く，そうした資料をこの機会に公開し，大学の教育や研究に資することも目的の1つにすえたからである。とくに，大谷大学博物館の「集古十種 原稿類」や慶應義塾大学の「模造古尺類」，京都大学の「正倉院宝物図」などは，初公開資料である。そのほかにも，これまで正当な評価をされてこなかった関西大学の「三鈷杵」も，このたび新たな解釈を得て日の目を見ることになった。

また，これまで来歴が不明だった国宝「線刻釈迦三尊等鏡像」（泉屋博古館）が，『聆涛閣集古帖』所載の鏡の拓本と一致し，その注記から，出土地が判明し，もとは聆涛閣コレクションの1つだったことも館外の展示プロジェクト委員により発見された。これは大きな成果である。ほかにも，本企画展示による新発見は多く，その過程は企

画展示図録のコラムや資料解説の中で可視化している。

各地の所蔵資料の展示にとどまらず、企画展示に合わせて「模造」も制作した。『聆涛閣集古帖』所載の「網代興」の図と関わりの深い、聖護院の網代興の5分の1模型を制作し（制作者は展示プロジェクト委員の落合里麻氏）、その制作過程を動画にまとめることを通じて、研究の成果を模造の制作によって示すというこれまでにない取り組みを行った。

さらに、企画展示会期中には、多くの研究者から新たな情報が提供され、提供された情報は歴博公式Twitterの中で随時情報を更新した。

企画展示の内容を補うものとして、展示の内容を簡便にまとめた解説シート、展示の内容をさらに掘り下げ、展示解説の根拠などを明示した展示図録、「茶室おこし絵図」の簡易体験キットなどを製作し、来館者向けに配付した。

次に、企画展示に関連する行事についてまとめておきたい。一般向けの行事としては、館内行事として歴博講演会（3月11日）、歴博フォーラム（4月1日）を実施し、館外の展示プロジェクト委員を中心に研究の成果が一般向けに披露された。そのほか、講演会としては、歴博友の会講演会（4月9日）、「よみがえる聆涛閣コレクション」講演会（4月15日（土）、於神戸市御影公会堂）を行った。この中で特筆すべきは、神戸市で行われた講演会である。もともと『聆涛閣集古帖』は神戸の豪商・吉田家の編纂した好古図譜であるため、企画展示のお披露目を兼ねたこの講演会では、定員130名の枠があつという間に埋まり、地元の人々の関心の高さがうかがわれた。

一般向けの講演会やフォーラムだけでなく、展示を利用した研究会も行われた。4月8日（土）には、第158回「書物・出版と社会変容」の研究会が歴博を会場として行われ、オンラインと対面の併用形式で、50名ほどの参加を得た。午前中に企画展示を見学したあと、午後に企画展示のテーマに関連する報告が特集された。報告者4名のうち、展示プロジェクト委員から一戸渉氏、藤原重雄氏の2名が共同研究や企画展示の研究成果を報告した。

情報発信としては、毎日新聞（3月20日）、読売新聞（3月30日）、産経新聞（4月20日）などの全国紙の文化欄で取材にもとづいた記事が取り上げられたほか、NHK—Eテレ「日曜美術館 アートシーン」（3月26日放送、4月2日再放送）でも企画展示の様子が放送された。このほか、各種インターネットメディアでも取り上げられたが、その特徴として、美術系のメディアに取り上げられたことは本企画展示の大きな特徴である。さらに、歴博の公式Twitterの中で、企画展のみどころを毎日写真入りで更新し、そのツイート数は80件近くに及んだ。

（2）課題

企画展示の準備期間がコロナ禍と重なり、具体的な準備に着手したのは2021年12月からと、出足が遅れた。全員が一堂に会する展示プロジェクト委員会は、2021年12月12日と2022年1月22日～23日の2回にとどまり、しかも2回とも完全オンライン形式だった。その後は、展示プロジェクト委員会を開かず、各分野による個別の打合せや事前調査などの実務作業をくり返しおこなった。小回りの利く方法であった一方で、全体への共有という点においては、やや不十分であった。

展示室内の解説をどのくらいまでおこなうかは、最後まで悩ましいところだった。1000年以上の時代幅があり、研究ジャンルの異なる資料群がならび、江戸時代の好古家のネットワークを解き明かすなど、もともと情報量が多く、複雑で錯綜したストーリーをもつ内容ではあったが、この企画展示では、饒舌な解説は排し、視線の対象がモノに向かうように心がけた。しかしながら、解説が足りない、解説をしてもらわないとわかりにくいという意見があったのも事実である。個々の資料キャプションは、図録の資料解説をリライトする形で、100字程度の解説にとどめたが、それでもわかりにくい部分が残し、もう少しやわらかい表現を心がけてもよかったかと反省している。

その意味で、コロナ禍によりギャラリートークができなかったのは痛手だった。個別に依頼されて企画展示室で解説をしたことはあったが、解説があるのとないのとは、展示に対する理解度に大きな差があることを実感した。音声コンテンツを作るべきだったかも知れないが、とてもそこまでの余裕はなく、断念せざるを得なかった。

その代わり、企画展示の内容を補足的に説明するために、Twitterを積極的に利用した。もちろん以前の企画展示からすでに行われていることではあるが、今回は独自にアカウントを作成することはせず、フォロワーの多い歴博の公式Twitterを利用し、会期中のツイート数は約80件におよんだ。これは、毎日1回ないし2回更新していた計算になる。Twitterが企画展示にどのような効果をもたらしたかについては今後なお精査する必要がある。

合わせて、展示資料リストを企画展示室で配布すべきだったと反省した。もちろん図録には展示資料リストを掲載しているが、図録を購入しない来館者も多く、展示替えが多いこともあり、展示資料の情報を一覧できるシートは来館者へのサービスとして必要であった。

会期中は週末を含めてできるだけ企画展示室に赴き、来館者の様子を観察したが、若い世代を含む幅広い世代の人たちにご覧いただいているという印象を受けた。ところが、歴博の講堂を会場として行った歴博講演会、歴博フォーラム、友の会講演会など、これまでのスタイルのイベントでは、いずれも高齢の聴講者の比率が高く、このギャップにおどろいた。おそらく常連の人たちが多いためかと思われるが、こうした常連の人たち以外に、さま

ざまな世代の人を取り込めるようなスタイルのイベントやしくみを作るにはどのようにしたらよいのが課題として残った。

なお、上記の3つのイベントについては、思うように集客を見込めなかった点も大きな反省点である。年度末～年度初めということもあり、集客が難しい時期に日程を設定したためかとも思われるが、一方で、『聆涛閣集古帖』の地元である神戸で行われた講演会（4月15日開催）では定員130名を超える申し込みがあり、必ずしも時期の問題とも考えられない。馴染みのない資料は敬遠されがちなのか、この点については引き続き分析を続けたい。

開幕当初に来館者数が伸び悩んでいたのは、事前のメディアキャラバンにおける展示代表者のプレゼンテーション能力不足によるところが大きい。むしろ開幕後に各種メディアに取り上げられてもらったおかげで、企画展示が次第に認知されるようになったものと思われる。

このように、さまざまな反省点があり、さまざまな課題が残ったが、このたびの企画展示では、借用資料の所蔵者や所蔵機関の担当者の方々、さらにはその関係者の方々が遠隔地から数多く来館され、この企画展示を喜んでいただいたことが何よりの励みになった。展示した「白瑠璃碗」（東京国立博物館蔵、重要文化財）の付属品は、白瑠璃碗が江戸時代にいかに大切に扱われてきたかを示す重要な証左だが、その保存に尽力したのは聖護院門跡の盈仁親王（1764～1831）と、茶道速水流の流祖である速水宗達（1739～1809）であった。会期末前日の5月6日、現在の聖護院御門主ご一行と速水流の家元ご一行総勢30名以上が、京都からはるばる来館され、およそ200年ぶりに白瑠璃碗の展示ケースの前で邂逅をはたしたことは、この企画展示ならではの歴史的な出来事であった。企画展示室は、各地に散らばった古器物の邂逅の空間であったばかりではなく、その古器物にまつわる人々の邂逅の空間ともなったことを、最後に書きとどめておきたい。

6. マスコミでの取り上げ

【新聞】

朝日新聞、読売新聞、毎日新聞、東京新聞、千葉日報、東洋経済日報、神戸新聞等、記事数24（2023年3月末）

【雑誌・ミニコミ誌】

美術の窓12月号、芸術新潮12・3・4月号、ぐるっと千葉3・4月号、一個人1月3日号、時空旅人3月号、目の眼4月号、Discover Japan 4月号等、37誌（2023年3月末）

【テレビ・ラジオ】

日曜美術館アートシーン 1番組（2023年3月末）

【その他】

Internet Museum、美術展ナビ 他ウェブ掲載多数 32件（2023年3月末）

【くらしの植物苑特別企画】

「季節の伝統植物」

春：伝統の桜草 2022年4月12日（火）～5月5日（木・祝）（22日）間）

夏：伝統の朝顔 2022年8月3日（水）～9月4日（日）（30日）

秋：伝統の古典菊 2022年11月1日（火）～11月27日（日）（24日）、肥後菊は12月4日（日）まで

冬：冬の華・サザンカ 2022年11月29日（火）～2023年1月29日（日）（47日）

1. 展示趣旨

江戸時代に隆盛をきわめた園芸文化は、日本独自の感性と高度な技術により、多種類の植物群にわたっておびただしい品種群を作り出してきた。それらの多くは明治時代以降の西洋園芸の急速な普及によって失われ、かつての園芸技術も消滅しようとしている。この特別企画は、絶滅に瀕している古典園芸植物の系統の探索と維持、生物学的な基礎研究と歴史的な基礎研究の融合を行い、その成果を展示として公開するものである。

2. 展示構成と主な展示品

特別企画「季節の伝統植物」では、四季に関わる4つの園芸植物を展示した。

春：「伝統の桜草」とは、江戸時代中期以降、園芸家によって野生種の中から変わった花が探し出され、多くの品種が生み出されてきた一連の桜草をさす。今年度は「桜草の栽培史—明治期から昭和初期まで」をテーマとした。パネル展示では、明治・大正・昭和初期の桜草に関連した歴史的な経緯と、大正時代に日本桜草会が設立され

て品種が増えていき、大輪花が流行していった様子を解説した。

夏：「伝統の朝顔」とは、江戸時代以降になると、文化・文政・天保期、嘉永・安政期、明治・大正期など、繰り返し朝顔ブームが訪れ、そのたびに葉と花の多様な変化や組み合わせを楽しむために作り出されてきた変化朝顔を意味する。今年度は、昨年の続編として「続・外国人がみた変化朝顔」をテーマとした。シーボルトとエリザ・シドモアの変化朝顔についての著述や、津田梅子がアメリカのホストファミリーに宛てた変化朝顔についての手紙をパネルで紹介した。

秋：「伝統の古典菊」とは、筆先のような花卉をもつ「嵯峨菊」や花卉の垂れ下がった「伊勢菊」、花卉のまばらな「肥後菊」、花卉が咲き始めてから変化していく「江戸菊」のことである。これらに花の中心が盛り上がり咲く丁子菊を加えた伝統的な中輪種は「古典菊」と呼ばれている。今年度は、「菊花 江戸時代の観賞―地植え・切花・鉢植え」をテーマに、江戸時代における菊花の観賞法としての地植え（花壇植え）と切花、鉢植えについて、パネルで紹介した。

冬：サザンカは、自生種に近い「サザンカ群」、獅子頭の実生またはその後代と考えられている「カンツバキ群」、サザンカとツバキの間で自然にできた雑種またはその後代と考えられている「ハルサザンカ群」の3グループに大別されるが、花はグループごとに10月中頃から翌年2月にかけて上記の順に咲いていく。今年度は「サザンカの保存と継承」をテーマとした。パネル展示では、サザンカ品種の発達と継承の経緯、品種保存形態の変化について紹介した。

3. 主な行事

特別企画「季節の伝統植物」に関連した観察会

2022年4月23日（土）：第277回「桜草の栽培史―明治期から昭和初期まで」	水田 大輝
8月27日（土）：第281回「続・外国人がみた変化朝顔」	仁田坂英二
11月26日（土）：第284回「菊花 江戸時代の観賞―地植え・切花・鉢植え」	平野 恵
12月17日（土）：第285回「サザンカの保存と継承」	箱田 直紀

苗の有償頒布〔桜草：4月12日（火）～5月3日（火）、朝顔：6月25日（土）・26日（日）

菊：7月23日（土）・24日（日）、サザンカ：11月26日（土）〕

4. 成果と課題

「伝統の桜草」では、明治時代以降、江戸時代の「連」の掟から脱却し、広範に桜草が普及していく経緯を紹介した。超巨大輪や個性的な品種が作出されたことにも触れ、現代につながる栽培史を示すことができた。

「伝統の朝顔」では、シーボルト、エリザ・シドモア、津田梅子による変化朝顔への言及を取り上げ、日本の資料だけでは知り得なかった情報や、外国人の朝顔や朝顔オブームについての考えをつかむことができた。なお、観察会については、新型コロナウイルス感染症対策のため、講堂で開催した。

「伝統の古典菊」では、江戸時代の菊花の観賞法を、地植え、切花、鉢植という3つの視点から見ていった。多様な楽しみ方や、現代との異同を伝えることができた。

「冬の華・サザンカ」では、品種の収集・保存・普及の担い手が、植木屋から公的機関へと変化したことを取り上げた。人気の低下に伴うものだが、かえって珍しい品種を見る機会に恵まれる結果となっていることを紹介した。

5. マスコミでの取り上げ

【新聞】

読売新聞、東京新聞、千葉日報、産経新聞、花卉園芸新聞、全私学新聞等、記事数30（2023年3月末）

【雑誌・ミニコミ誌】

NHK趣味の園芸11月号、LANDSCAPE DESIGN12月号、プランツ＆ガーデン'22winter、園芸ガイド2023冬 号、ぐるっと千葉5・8・9・11・12・1・2・4月号等、50誌（2023年3月末）

【テレビ・ラジオ】

newsちば等、4番組（2023年3月末）

【その他】

みんなの趣味の園芸 他ウェブ掲載多数 45件（2023年3月末）

6. 展示プロジェクト（◎：代表、○副代表）

(館外)

辻 誠一郎 東京大学名誉教授
 仁田坂英二 九州大学大学院理学研究院・准教授
 箱田 直紀 恵泉女学園大学名誉教授
 平野 恵 台東区立中央図書館・専門員
 岩淵 令治 学習院女子大学・教授
 水田 大輝 日本大学生物資源科学部・専任講師

(館内)

◎青木 隆浩 本館研究部・准教授
 日高 薫 本館研究部・教授
 ○澤田 和人 本館研究部・准教授
 川村 清志 本館研究部・准教授
 山村 聡 本館管理部・専門職員

[特集展示]

第3展示室「水滸伝ブームの広がり」

2022年8月3日(水)～9月4日(日)

1. 展示趣旨

宋江や林冲ほか108人の豪傑たちの活躍とその悲運を描く中国・明代の長編小説『水滸伝』は江戸初期に伝来し、漢学者たちの間で関心を持たれていたが、岡島冠山による翻訳『通俗忠義水滸伝』(宝暦7～寛政2・1757～90)などにより、次第に読者層を拡大していく。我が国の歴史物語に翻案した曲亭馬琴の『南総里見八犬伝』(文化11～天保13・1814～42)などの読本もつくられ、後者は歌舞伎や草双紙にも取り入れられるほどの人気を得た。馬琴は豪傑を日本の女性に置き換えた草双紙『傾城水滸伝』もヒットさせ、こうした大衆的レベルでの水滸伝ブームは浮世絵の世界にも波及し、文政(1818～30)末期に出た歌川国芳の錦絵シリーズ「通俗水滸伝豪傑百八人之一個(壱人)」は彼にとっての出世作となっただけでなく、武者絵というジャンルの確立に大きな役割を果たした。

当館は2004年に江戸末期の大衆文化に登場する侠客らを取り上げた企画展「民衆文化とつくられたヒーローたち アウトローの幕末維新史」(展示プロジェクト代表・高橋 敏)を開催して注目されたが、その準備の過程で収集した江戸末期から近代にかけての水滸伝関係資料が相当の点数にのぼる。今回の特集展示はしばらく展示する機会がなかった館蔵の水滸伝関係の資料から、『通俗忠義水滸伝』や葛飾北斎の絵本『忠義水滸伝画本』(文政12年・1829)といった版本、水滸伝錦絵中の最高傑作とされる国芳の「通俗水滸伝豪傑百八人之一個(壱人)」の一部、水滸伝の豪傑を題材とした見世物を描く錦絵、あるいは我が国の侠客の世界に翻案した錦絵など、江戸時代末期における出版界の水滸伝ブームの広がりを示す資料を展示する。

2. おもな展示資料

岡島冠山訳 『通俗忠義水滸伝』 H-1429 (「近世水滸伝関係資料」)
 鳥山石燕 『水滸画潜覧』 H-1429 (〃)
 葛飾北斎 『忠義水滸伝画本』 H-1429 (〃)
 歌川国芳 「通俗水滸伝豪傑百八人之一個(壱人)」 H-1429 (〃)
 歌川国芳 「豪傑水滸伝双六」 H-1429 (〃)
 歌川国芳 「当世生人形」 F-303-326
 三代歌川豊国 「近世水滸伝」 H-22-1 など

3. 関連行事

解説会(新型コロナウイルス感染防止対策のため中止)

4. 刊行物

展示解説シート、広報用ポスター・チラシ

5. 成果と問題点

充実した質と量を持ちながら2004年の企画展「民衆文化とつくられたヒーローたち アウトローの幕末維新史」以後、まったく活用されてこなかった「近世水滸伝関係資料」の中から、錦絵や版本といった浮世絵作品を中心に ある程度まとまった点数を公開することができた。近年、歌川国芳の水滸伝は人気が高く、SNSなどで一定の注目を集めたが、それだけに彼の代表作である「通俗水滸伝豪傑百八人之一個（壱人）」シリーズからより点数を多く展示すべきだったかもしれない。

また、所蔵資料の制約から、水滸伝ブームの派生作として地元房総を舞台とする『八犬伝』関連の展示が貧弱であったことが反省点である。

6. マスコミの取り上げ

【新聞】

毎日新聞、東京新聞、千葉日報等、記事数13（2023年3月末）

【雑誌・ミニコミ誌】

歴史街道9月号、ぐるっと千葉8・9月号等、14誌（2023年3月末）

【テレビ・ラジオ】

ケーブルネット296「歴博のミカタ」1番組（2023年3月末）

【その他】

ARTAgenda 他ウェブ掲載多数 11件（2023年3月末）

7. 展示プロジェクト（◎：代表）

◎大久保純一（情報資料研究系 教授）

第3展示室「印籠とたばこ入れ」

2022年10月25日（火）～2022年12月4日（日）

1. 展示趣旨

（1）新収蔵のコレクションの公開

歴博は、平成25年度に根付・印籠・袋物のコレクション（H-1869）、平成28年にたばこ入れ（H-1904）、平成30年度には印籠及び印籠筆筒（H-1923）を相次いで受贈した。平成27年に開催した特集展示「印籠」において、平成25年度受贈分の印籠の中から、100点弱を選んで公開したが、いまだ未公開の資料が多く残されている。そこで今回の特集展示は、館蔵資料の中から、男性の装身具である印籠とたばこ入れをとりあげて未公開資料を中心に展示し、歴博が所蔵する近世資料の豊かさを示すことを目的とする。

（2）江戸時代から受け継がれた生活文化と細密工芸技術の紹介

印籠は、武家や一部の裕福な町人男性が佩用する携帯用の薬入れとして、近世初期から急速な流行をみた。当初より装身具としての機能が重視され、高度な工芸技術を駆使した装飾をとまなうものが多い点が特色である。一方、喫煙の習慣の広まりとともに普及したたばこ入れは、同じく実用を兼ねた装身具として、町人を中心に庶民から支持され、近代に至るまで愛好された。今回の特集展示では、これら印籠とたばこ入れにみる多様な素材や工芸技術、ウィットに富む装飾デザインなどを通じて、都市を中心に華開いた豊かな生活文化を浮き彫りにする。

2. おもな展示資料

H-1869 根付・印籠コレクション（316点のうち）

H-1923 印籠および印籠筆筒（13点）

H-39 星野平次郎袋物コレクションよりたばこ入れ

H-1049 輪舞遊楽図屏風 四曲一双

など141点

3. 関連行事

解説会（新型コロナウイルス感染防止対策のため中止）

4. 刊行物

展示解説シート、広報用ポスター・チラシ

5. 成果と問題点

141点の展示資料のうち113点が初公開資料であり、これまで未公開であった多くの資料を展示するという所期の目的を達成することができた。視覚効果の高い多岐にわたる資料を展示したことから、来館者からは好意的な反応が多かった。

近世初期から急速に流行し始め、江戸時代の男性の装いのアクセサリとして発展したこと、ともに根付を用いて身につける「提げ物」であること、多彩な素材や工芸技術を駆使した小型の装飾品であることなど、印籠とたばこ入れには共通点が多い。しかし、印籠の使用者が武家を中心とした富裕な階層に限られたのに対し、たばこ入れは町人を中心に庶民から支持された点が大きく異なる。さらに印籠が武士の身分の消滅とともに本来の役割を失い、外国人収集家向けの商品へと転換していったのに対し、たばこ入れは、戦前ごろまで和装のアクセントとして愛好され続けたところも対照的である。今回は、印籠とたばこ入れを同時に展示し、その共通点や違いを見くらべられるようにしたところが平成27年の「印籠」展と異なる点であったが、展示スペースの関係もあり、両者のたどった歴史等については、あまり深く掘り下げることはできず、広報活動等により補った。

受贈資料を含め、館蔵の装身具資料は膨大な数にのぼり、未だ公開されていない資料も含まれている。これらの活用を今後も計画的に進めていくことが必要である。

6. マスコミの取り上げ

【新聞】

朝日新聞、東京新聞、千葉日報等、記事数11（2023年3月末）

【雑誌・ミニコミ誌】

月刊アートコレクターズ10月号、SPUR1月号、ぐるっと千葉10～12月号等、18誌（2023年3月末）

【テレビ・ラジオ】

ケーブルネット296「歴博のミカタ」、296ニュース 2番組（2023年3月末）

【その他】

チイコミ！ 他ウェブ掲載多数 5件（2023年3月末）

7. 展示プロジェクト（◎：代表）

◎日高 薫（情報資料研究系 教授）

澤田和人（情報資料研究系 准教授）

第3展示室「中世公家の〈公務〉と生活—広橋家記録の世界—」

2023年3月7日（火）～5月7日（日）

1. 展示趣旨

本特集展示は、2020年度から開始した基盤研究2「『広橋家旧蔵記録文書典籍類』を素材とする中世公家の家蔵史料群に関する研究」（研究代表：家永遵嗣）の研究結果を展示にて公表するものである。本共同研究では、「広橋家旧蔵記録文書典籍類」に含まれる日記・公務関係文書・先例調査文献を、広橋家歴代当主それぞれの経歴と結びつけて位置づけ、その全体像をイエの歴史として整理して提示することを主目的に掲げている。本特集展示では、館蔵の実物資料を用いてこの研究成果を具体的に示し、多様な資料群からなる「広橋家旧蔵記録文書典籍類」の魅力と奥深さを紹介するとともに、広橋家からみた中世における公家社会の具体相を展示する。

なお、本館では2018年度に『八省御斎会部類記』（H-63-994）、2019年度に『大仁王会部類記』（H-63-995）、2020年度に『春日経供養家記抄』（H-63-996）・『兼仲卿暦記』自正安二年正月四日至二十一日（H-63-997）、2021年度に『兼仲卿暦記』自正安二年正月二十二日至三月二十九日（H-63-998）を相次いで購入した。これらの資料は、いずれも広橋家当主によって作成されたものであり、「広橋家旧蔵記録文書典籍類」と一体をなす。本特集展示では、これら新収蔵資料もあわせて公開する。

2. おもな展示資料

【広橋家旧蔵記録文書典籍類】

『経光卿暦記』・『経光卿記』・『経光卿御斎会奉行記』・『兼仲卿記』・『仲光卿記』・『兼宣公記』・『兼宣公暦記』・『綱

光公暦記』・『綱光公記』・『兼頭卿暦記』・『守光公記』・『義満公任槐召仰儀并大饗雑事定書』・『経嗣公記抄』・『兼綱公議状草』・『制誠』・『守光公書状案』・『足利義成元服記 文安六年』・『県召除目成文』・『後柏原院践祚御訪方註進』・『後土御門院御即位惣用帳』・『御譲位惣用帳御譲位惣用帳』・『永正度御即位料足請取』・『文明九年小叙位方切符』・『脩明門院熊野御幸記』・『頼資卿熊野詣記』・『弁官補任』自寛弘八年至久寿元年・『補略 永禄六年』・『公卿補任』自天文十年至弘治三年・『年号勘者例』・『年号勘者例 正応～応永』・『改元部類記』・『除目』・『除目執筆記 下』・『天文元年具注暦』・『広橋家所伝文書雑纂』・『八省御斎会部類記』・『大仁王会部類記』・『春日経供養家記抄』・『兼仲卿暦記』自正安二年正月四日至二十一日・『兼仲卿暦記』自正安二年正月二十二日至三月二十九日など

【船橋清原家旧蔵資料】

『即位第一』・『即位下行帳 第四』・『御即位下行帳 越前 永正八』

【田中穰氏旧蔵典籍古文書】

『慶長十六年御即位雑用一式帳』・『御即位之図』

約70～80点

3. 関連行事

歴博フォーラム「中世公家の〈公務〉と生活—広橋家記録の世界—」

日時：2023年4月15日（土）13時～16時30分

場所：国立歴史民俗博物館講堂

報告者：家永達嗣（学習院大学・教授）・尾上陽介（東京大学史料編纂所・教授）・高橋秀樹（國學院大学・教授）・榎原雅治（地震予知総合研究振興会・副主席主任研究員）・湯川敏治（学識経験者）・久水俊和（追手門大学・准教授）

司会：田中大喜（歴史研究系・准教授）

4. 刊行物

展示解説シート、広報用ポスター・チラシ

5. 成果と問題点

本特集展示の母体となった「広橋家旧蔵記録文書典籍類」は、中世における広橋家歴代当主の日記が特に著名で研究の蓄積があるが、膨大な資料群のため、そのほかの資料についてはあまり知られていなく、それらが本資料群のなかにどのように位置づけるのかがいまだに明らかにされていない。本特集展示では、中世の広橋家歴代当主の活動と結びつけながら、「広橋家旧蔵記録文書典籍類」中の中世資料の来歴と性格を提示しており、上記の課題の究明に向けた一歩を記した点で大きな成果を挙げることができたと考ええる。また、本特集展示では、近年の中世の公家社会に関する研究成果を踏まえながら、その実態について展示した。本館総合展示第2室では、鎌倉時代以降の公家に関する展示がなされていない現状に鑑みると、本特集展示は現在勧められている第2室のリニューアル事業に大きく貢献するものにもなったと考える。

しかし、未解明の部分が多いという本資料群の性質と関わって、展示内容があまりにも専門的にすぎ、一般観覧者には難解な内容となった点は否めない。また、一般観覧者の理解を助けようとしたあまり、文字数の多いキャプション・パネルが多くなったことも、情報量の過多によりかえって一般観覧者の理解を妨げる結果を招いてしまったように思う。展示方法について十分な検討をする時間をとれなかった点が一番の問題点であり、反省する次第である。

6. マスコミの取り上げ

【新聞】

朝日新聞等、記事数3（2023年3月末）

【雑誌・ミニコミ誌】

ぐるっと千葉3・4月号、目の眼4月号等、11誌（2023年3月末）

【テレビ・ラジオ】

2023年3月末までは該当なし

【その他】

Tokyo Live & Exhibits 他ウェブ掲載多数 4件（2023年3月末）

7. 展示プロジェクト（◎：代表）

◎田中 大喜（歴史研究系・准教授）

小倉 慈司（歴史研究系・教授）

第4展示室「来訪神，姿とかたち―福の神も疫神も異界から―」

2023年1月17日（火）～2023年5月14日（日）

1. 展示趣旨

人びと個々人や地域社会に、幸福にしても、不幸にしても、人の力や人智の及ばない事象について、何らかの神霊やその仕業によるものと長い時代にわたって信仰されてきた。幸福をもたらす福の神は翁姿で、病苦や災害をもたらす神霊は、おそろしい形相の鬼の姿で表現されることが多い。しかしながら、実際には、地域や時代により神霊の姿は多様である。また、その姿は、日本人にとっては外来の宗教である仏教や陰陽思想の大きな影響を受けて形成されてきた。

幸福、あるいは疫病や災害等の不幸、いずれにして異界から訪れる神霊がもたらすものと信仰されてきたが、仏教等の外来の宗教の影響も考えつつ、琉球地域を含む日本諸地域の神霊の姿、イメージと信仰の諸相をテーマとして、館蔵の民俗仮面を中心に、以下の構成により展示した。

- I. 鬼は外の起源、古代宮中の追儼
- II. 寺院の年頭の護国の仏教行事と追儼、冬から春の神楽と仮面
- III. 琉球地方、海上彼方の異郷から訪れる来訪神
- IV. 東アジアに広がる追儼の文化：貴州省トン族（侗族）追儼の文化

なお、松尾がメンバーとなった共同研究「歴博蔵中国侗族（トン族）関係民俗仮面・衣装の調査研究」（代表：黄潔（現、名古屋大学特任助教）、2018年度）、松尾副代表の共同研究「転法輪鈔」（2010年度～2012年度）の研究成果の一部を、一般に向けてわかりやすく伝えられるように努めた。

2. おもな展示資料

方相氏図（F-281-222）

奈良県五條市奈良県五條市念仏堂鬼面（F-82-1, F-82-2, F-82-3）

愛知県花祭り鬼面（F-26-106, F-26-107）

出雲見々久神楽面（F-176）

三重県伊賀市修正会鬼頭・供物（成花・いばり栗・夫婦つばめ等）、

薬師寺・熊野等牛玉宝印牛玉宝印（個人蔵）

ミルク（弥勒、波照間島、F-51-2）、

アングマ（石垣島、F-386）、フサマラー（波照間島、F-51-1）

貴州省トン族（侗族）儺舞仮面・装束（F-158）

など

3. 関連行事

2023年度「歴博映画の会」において、2023年5月13日（土）民俗研究映像『薬師寺花会式～行法と支える人々～』（2007年、松尾恒一、71分）を上映。

ギャラリートーク等の解説会は、新型コロナウイルス感染防止対策のため、開催を見合わせた。

4. 刊行物

展示解説シート、広報用ポスター・チラシ、特集展示解説「第4展示室特集展示 来訪神，姿とかたち―福の神も疫神も異界から―」（『国立歴史民俗博物館友の会ニュース 歴博友の会』224,2022年12月5日）

5. 成果と問題点

「展示趣旨」に記載した共同研究のほか、歴博における松尾代表の共同研究「宗教者の身体と社会」（2003～2006年度）、「東アジアの宗教をめぐる交流と変容」（2012～2014年度）、及び科研「日本仏教と東南アジア仏教との比較研究-政治と権力の視点を中心として」（2019年度～2023年度）における研究成果に基づいて展示を行い、研究成果

の社会への還元を行うことができた。

2023年3月10日（金）、歴博において実施された「令和4年度人文知コミュニケーター資質向上プログラム」において、「特集展示「来訪神、姿とかたち―福の神も疫神も異界から―」―展示の土台となった研究と、展示のための地域との交流―」を報告し、機構（国立民族学博物館・国文学研究資料館・総合地球環境学研究所・国際日本文化研究センター）の若手研究者と、フィールドワーク研究における地域との関わり、研究による地域貢献や成果の社会還元、地方自治体や国、さらにはユネスコによる民俗文化の文化財登録等の問題について活発な討議を行い、人文知コミュニケーターの資質向上に貢献できた。

また、民俗学・文化人類学を専門とする研究者の大学の授業やゼミ学生・大学院生の見学も多く、大学・大学院の教育・研究のために、日本各地の民俗仮面が使用される諸行事・儀礼について実資料を実見して、日本文化について理解を深めることにも大きな貢献をした。

開催期間中に中国・韓国の研究者より、それぞれの国の仮面の祭祀について情報提供を受け、東アジア地域の民俗を専門とする研究者の関心も喚起したことは特筆される。展示期間中にこれら海外からの情報も反映させ、東アジアの文化交流史の観点からより充実した展示へと発展できた。

歴博館蔵資料の展示により、一般、専門研究者のいずれにも研究成果に基づく貢献ができ、さらなる研究の深化や社会への還元が、今後の課題である。

6. マスコミの取り上げ

【新聞】

朝日新聞、読売新聞、毎日新聞、東京新聞、千葉日報、全私学新聞、北日本新聞、北陸中日新聞、大阪日日新聞、山陰中央新報、南日本新聞、琉球新報等、記事数60（2023年3月末）

【雑誌・ミニコミ誌】

ムー3月号、東京人4月号、芸術新潮3・4月号、ぐるっと千葉1～4月号、目の眼12～4月号、等、32誌（2023年3月末）

【テレビ・ラジオ】

ケーブルネット296「歴博のミカタ」 1番組（2023年3月末）

【その他】

FASHION PRESS 他ウェブ掲載多数 15件（2023年3月末）

7. 展示プロジェクト（◎：代表）

◎松尾 恒一（本館研究部・教授）

【展示プロジェクト委員会】

企画展示「加耶―古代東アジアを生きた、ある王国の歴史―」

1. 展示プロジェクトの趣旨

古墳時代の「倭」の社会は、朝鮮半島から多様な文化をさかんに受け入れ、取捨選択し、変容させ、みずからの文化として定着をはかる。それは須恵器や鉄器の生産、金工技術、馬匹生産、灌漑技術、炊事道具やカマドなど多岐にわたる。その中で最も頻繁な交渉を重ねた政治体が加耶であった。加耶はひとつの古代国家を形成することではなく、金官加耶、大加耶、小加耶、阿羅加耶などがいくつかの地域政治体がゆるやかな連携をはかっていた。その加耶の実態は、近年の韓国における調査・研究によってかなり具体的に明らかになっている。その最新の姿を墳墓や集落から出土した諸資料から提示し、あわせて倭との交渉様態を描くのが、本展示プロジェクトの趣旨である。そのために、学術交流協定の締結機関である韓国国立中央博物館に資料貸与や展示内容についての全面的な協力を仰ぐ。中央博では2019年冬に、加耶の実態に関する企画展示を実施した。また、九州国立博物館においても、加耶に関する展示を企画していることから、本展示は歴博と韓国国立中央博物館及び九州国立博物館との共催展示とする。当初は、2020年7月に開催予定であった本展は、コロナ禍のために延期となった。韓国国立中央博物館、九州国立博物館との協議によって、2022年後半期における開催を予定している。

総合展示第1展示室のテーマ4（倭の登場）、テーマ5（倭の前方後円墳と東アジア）の国際交流に関する内容やこれまで進めてきた韓国諸機関との国際交流事業、歴博共同研究「古墳時代・三国時代の日朝関係における交渉経路と寄港地に関する日韓共同研究」を展示の学術的な基盤とする。

2. 展示プロジェクト委員会の概要

図録、展示室設計、演具、展示パネル、ポスターなどの準備、実際の製作を推進し、予定通り、2022年10月4日（火）から12月11日（日）まで、展示を開催した。展示終了後、次の巡回先である九州国立博物館へ展示資料を運搬し、演具作業に協力した。韓国から当館への資料運搬時、ならびに九州国立博物館への資料運搬時に展示資料の状態点検を行い、すべての資料について問題がなかったことを確認した。

九州国立博物館における資料点検の終了をもって、委員会としてのすべての業務を終了した。

3. 展示プロジェクト委員（◎代表、○は副代表）

（館外）

梁 成赫 大韓民国国立中央博物館考古歴史部・学芸研究官

白井 克也 九州国立博物館企画課・課長

（館内）

○上野 祥史 本館研究部・准教授

◎高田 貫太 本館研究部・教授

仁藤 敦史 本館研究部・教授

松木 武彦 本館研究部・教授

企画展示「いにしえが、好きっ！—近世好古図録の文化誌—」

1. 展示プロジェクトの趣旨

古いモノに関心を持ち、これを集め、伝えようとする行為は、前近代から存在する。実際にモノを集めることはもちろん、それが難しい場合は拓本や絵という形で、それらを集め、人々と情報を共有しようとした。こうした営みは、近代以降の博物館にもつながる発想であるが、前近代にはその前提として古器物に対する関心は広く、そして豊かに存在していたのである。

本展示では、幕末～明治にかけて神戸の豪商・吉田家が三代にわたり編纂した古器物図譜（＝図録）である『聆涛閣集古帖』（本館蔵、以下『集古帖』）に関する共同研究「『聆涛閣集古帖』の総合資料学的研究」（研究代表者：藤原重雄、2017年度～2019年度）の成果を中心に、『集古帖』に描かれた古器物の実物や複製・復元品等を立体的に展示するほか、『集古帖』を編纂した神戸の吉田家に関する資料から浮かび上がる好古図譜編纂の背景、同時代に関心が高まる正倉院宝物図とその模造製作の世界、さらには近世好古家の古器物へのまなざしとネットワークなどに関する展示を通じて、前近代における歴史資料の分類や概念、古器物の情報共有を通じた「知のネットワーク」の実態を展示によって明らかにする。あわせて、さまざまなモノを蒐集・整理し、これを伝えていった歴史について広い視野から展示する。

2. 展示プロジェクト委員会の概要

2022年度は、全員参加による展示プロジェクト委員会を開催せず、必要に応じて、個別に打合せをおこなう形で、展示資料の選定を進めていった。本企画展示の性格上、ジャンルが多岐にわたり、各分野の専門家と相談しながら進めていくことが合理的と判断したためである。考古学は、村木と三上が中心となり、村野、吉田、徳田、山下といった考古学分野の専門家と個別に打ち合わせた。文献史学分野は、藤原、一戸、小倉、三上によって、展示資料の選定や事前調査をおこなった。美術史分野については、藤原、清水、三上が中心となって資料選定をおこない、正倉院宝物図については稲田がこれを補佐した。こうして展示資料リストを確定した上で、村木、三上により企画展示室のゾーニング原案や、展示図録の構成の原案を作成した。確定した展示資料にもとづき、各展示プロジェクト委員へ資料解説を依頼し、展示図録全体の台割りやレイアウトを村木が作成し、本論にあたる各章のテーマ解説等を三上が執筆した。

合わせて、関連イベントについて、歴博講演会と歴博フォーラムの2つのイベントで、できるだけ多くの館外の展示プロジェクト委員の研究成果を披露することをめざし、歴博講演会では藤原、一戸、三上の3名、歴博フォーラムでは、吉田、村野、清水、落合、加藤（展示協力者）、山下の6名が登壇することになった。

3. 展示プロジェクト委員（◎：代表、○：副代表）

（館外）

- 藤原 重雄 東京大学史料編纂所・准教授
 一戸 渉 慶應義塾大学斯道文庫・教授
 稲田奈津子 東京大学史料編纂所・准教授
 岩橋 清美 國學院大學・准教授
 落合 里麻 東北生活文化大学・講師
 佐藤 洋一 学識経験者
 清水 健 東京国立博物館・学芸研究部調査研究課工芸室
 徳田 誠志 関西大学・客員教授
 古市 晃 神戸大学人文学研究科・教授
 村野 正景 京都文化博物館・学芸員
 山下 大輔 関西大学博物館・学芸員
 吉田 広 愛媛大学ミュージアム・教授
 清武 雄二 葛飾区郷土と天文の博物館
 (館内)
 ○小倉 慈司 本館研究部・教授
 島津 美子 本館研究部・准教授
 仁藤 敦史 本館研究部・教授
 村木 二郎 本館研究部・准教授
 ◎三上 喜孝 本館研究部・教授
 後藤 真 本館研究部・准教授

企画展示「陰陽師とは何者か—うらない、まじない、こよみをつくる—」

1. 展示プロジェクトの趣旨

現在の日本列島上の社会の基盤を成している暦日感覚は、明治の改暦で太陽暦が採用されたことが大きな画期となったことはよく知られている。2023年は明治改暦（1873年）から、ちょうど150年の節目の年に当たる。このことをふまえて共同研究「奈良暦師吉川家文書を中心とする暦・陰陽道研究の史料基盤形成」（代表・梅田千尋〔京都女子大学〕、2018～2020年度）による資料調査および研究の成果を中心とする展示を行う。

前近代の暦は陰陽師が関与して作成されたが、そのことは忘れられかけている。天文観測に基づき、暦を作成し、それに伴う占いやまじないに携わった陰陽師の活動に光をあて、陰陽道の歴史と民俗を総合的に描くことをめざしたい。

ここでは共同研究の成果でもある『新陰陽道叢書』の刊行（2020～2021年）をはじめとする陰陽道研究の進展に依拠しながら、陰陽道の基礎的な資料を集成し、日本列島社会における暦とその作成・管理をはじめとする暦日・天文等に関する陰陽道の姿を具体的に提示する。その際には陰陽師という存在とその職掌に着目し、前近代の暦に深く関わった陰陽道の形成から展開、衰退に関する史資料をなるべく広範に展示することで、俗的なイメージが先行しがちな陰陽道の実体とその歴史的民俗的な役割を提示し、新たな研究の礎石としたい。確実な資料に基づいて、陰陽道・陰陽師について考える機会を提供することが目的である。さらに暦関係資料を多角的な視点からとらえ、暦をめぐる文化を考察するとともに、時間をめぐる意識や観念の形成、天変や観天望氣をめぐる習俗までをもとらえる糸口としたい。

2. 展示プロジェクト委員会の概要

展示構成、展示資料（館蔵および借用予定資料）の確認と調整を対面およびリモートで進めた。

第1回 令和4年5月29日（日）（リモート）

会期、巡回展、図録の外部出版等について議論し、併せて関連イベントについて確認した。会期については10月3日～12月10日とすることとし、福井県への巡回展の可能性についても報告があった。図録は外部出版を試みるようになった。関連イベントとしては、シンポジウム（歴博フォーラム）、講演会などを行なうこととした。

第2回 令和4年9月7日（水）・8日（木）（対面 於歴博）

館蔵資料を確認し、展示予定資料の精査を行なった。併せて、図録の編集日程、関連イベント（歴博フォーラムほか）の日時・内容を確認し、巡回展の見通しについての報告があった。さらに展示プロジェクト委員の追加が議

論，決定された。

第3回 令和4年11月13日（日）（ハイブリッド＝対面・リモート併用）

新任の委員の紹介ののち，展示資料リストの確認および調整を行なった。また資料調査（宇佐，京都）の結果が報告された。

第4回 令和4年12月17日（土）（リモート）

前回に引き続き，展示資料の確認と調整を行なった。また借用先への内諾について，その分担についても議論した。図録の目次案，執筆分担が示され，調整が図られた。併せて見本原稿が提示された。

第5回 令和5年1月28日（土）（リモート）

企画展示室Bの展示資料の追加について話し合い，確認された。また展示室における展示の工夫（来館者への見せる＝魅せるポイントの確認，提示の技法など）を全体にわたって議論した。

第6回 令和5年3月12日（日）（リモート）

企画展示Aにおける「陰陽師の仕事」コーナーの展示資料調整を議論した。

3. 展示プロジェクト委員（◎：代表，○：副代表）

（館外）

梅田 千尋 京都女子大学・教授
 林 淳 愛知学院大学・教授
 細井 浩志 活水女子大学・教授
 赤澤 春彦 摂南大学・准教授
 遠藤 珠紀 東京大学史料編纂所・准教授
 小田 真裕 船橋市資料館・主任主事
 松山由布子 広島大学・特任助教
 下村 育世 一橋大学・特任講師
 近藤 絢音 神奈川県立公文書館
 小田島梨乃 リクルート／東京大学大学院博士課程
 垣東 敏博 暦会館／若狭路文化研究所
 川波 久志 福井県立若狭歴史博物館
 水谷 友紀 京都府立大学
 山本 琢 京都府立京都学・歴彩館

（館内）

◎小池 淳一 本館研究部・教授
 後藤 真 本館研究部・准教授
 田中 大喜 本館研究部・准教授
 福岡万里子 本館研究部・准教授
 ○松田 睦彦 本館研究部・准教授
 鈴木 卓治 本館研究部・教授

企画展示「歴博色尽くし」

1. 展示プロジェクトの趣旨

「色」をテーマとした館蔵資料展として企画しました。ここでは「色」という言葉を大きくとらえ，素材のもつ質感や微細な構造までを含めたものとします。特徴的な色彩や質感をもつ館蔵資料を取り上げ，歴史学・考古学・民俗学・自然科学の観点から展示・解説を行い，日本における色と人間とのかかわりについて考えます。権威あるいはおそれを象徴する存在としての色，職人らによって生み出される技芸としての色…「色」というキーワードから，館蔵資料のさまざまな見方を引き出してみたいと思います。（開催要項より）

2. 展示プロジェクト委員会の概要

2022年度は展示プロジェクト会議を1回、2023年2月13日に開催したほか、各コーナー担当委員と個別に打ち合わせを実施した。

本企画展示は、会期を2024年3月12日（火）～5月6日（日）の50日間、会場を企画展示室Aとして開催する旨、開催要項を提出し、承認された。展示は6つのコーナー（下記）からなるオムニバス形式とする予定である。

- （ア）大きさと色—2体の建築彩色模型—（坂本、濱島）
- （イ）人と色をむすびつけるモノ—色見本の世界—（鈴木、澤田、島津）
- （ウ）色を生み出す技術—漆工芸にみる色彩表現—（日高）
- （エ）意味付けられた色—ふたつの「赤絵」：疱瘡絵と開化絵—（大久保、関沢）
- （オ）日本古代の色—社会が大きく変わる古墳時代の輝きと彩り—（高田、上野）
- （カ）金属と色—鉄の隕石で作られた刀剣—（斎藤）

印刷物として、ポスター、チラシ、展示図録のほか、展示室入口で配布する解説シートおよび出品目録を作成する予定である。

関連コンテンツとして、音声ガイド（2022年度に整備された展示場WiFiを利用したスマートホン用アプリ）ならびにYouTubeにて公開するショート動画を作成する予定である。

関連イベントとして、歴博講演会、ギャラリートークのほか、バーチャルツアー（ZoomもしくはYouTube Liveを利用したりモート展示解説会）を実施する予定である。

3. 展示プロジェクト委員（◎：代表、○：副代表）

（館外）

濱島 正士 国立歴史民俗博物館・名誉教授

（館内）

◎鈴木 卓治 本館研究部・教授

○坂本 稔 本館研究部・教授

上野 祥史 本館研究部・准教授

大久保純一 本館研究部・教授

斎藤 努 本館研究部・教授

澤田 和人 本館研究部・准教授

島津 美子 本館研究部・准教授

関沢まゆみ 本館研究部・教授

高田 貫太 本館研究部・教授

日高 薫 本館研究部・教授

企画展示「変わりゆく歴史資料像—過去を知るための新たなモノたち（仮）」

1. 展示プロジェクトの趣旨

さまざまな歴史を描くための最も基本となるものは歴史資料（資料）である。この歴史資料をめぐる状況は、近年大きく変わってきている。一つにはデジタル化とWeb環境の進展による変化である。歴史資料情報の新たな流通の形態が生まれ、アクセスの状況についても変化をもたらした。また、自然科学的手法を用いたものも多く見られるようになってきた。このような手法の変化を広く知ってもらい、新たな資料の世界を見てもらうことを目指す。

もう一つには、各地域の歴史資料をめぐる状況そのものの変化もある。災害により資料が失われるという危機については、すでに指摘されている通りだが、これに加えて被災した地域で新たに発見される資料（災害資料）についても、近年クローズアップされるようになってきた。現代の何気無いものが資料になり、アーカイブされるようになる状況がある。また、日々の日常で失われる資料についても、大きな課題となっている。そして、新型コロナウイルスに関わるアーカイブなども特に大きな課題となっており、「今の記録」を行うことも必要になっている。それらの課題を全体としてとらえ、広く新たな歴史像を描くことを目指したい。

2. 展示プロジェクト委員会の概要

令和5年3月12日 大会議室及びオンライン（ハイブリッド）

展示代表から、展示全体の目的について説明を行い、方向性の確認を行った。その後、大まかな展示構成について

て合意を得るとともに、特にどのような点を注意すべきかなどの検討を進めた。展示すべき資料などの概要について確認を行い、それぞれの担当を決定した。今後のために、実際の資料リスト作成に向けた構成の詳細決定や、さらにより広範な展示に関わる視点を入れるための工夫などを検討した。その後、実際に参考とすべく、委員会時に開催されていた「いにしえが好き」展を見学し、具体的な展示手法などの確認を行った。

3. 展示プロジェクト委員（◎：代表，○：副代表）

（館外）

相川 陽一 長野大学
 岡田 義弘 九州大学
 佐藤 琴 山形大学
 曾我麻佐子 龍谷大学
 南 勇輔 与論町教育委員会
 山内 利秋 九州保健福祉大学
 吉川 圭太 神戸大学

（館内）

川邊 咲子
 小倉 慈司
 三上 喜孝
 橋本 雄太
 ○天野 真志
 ◎後藤 真